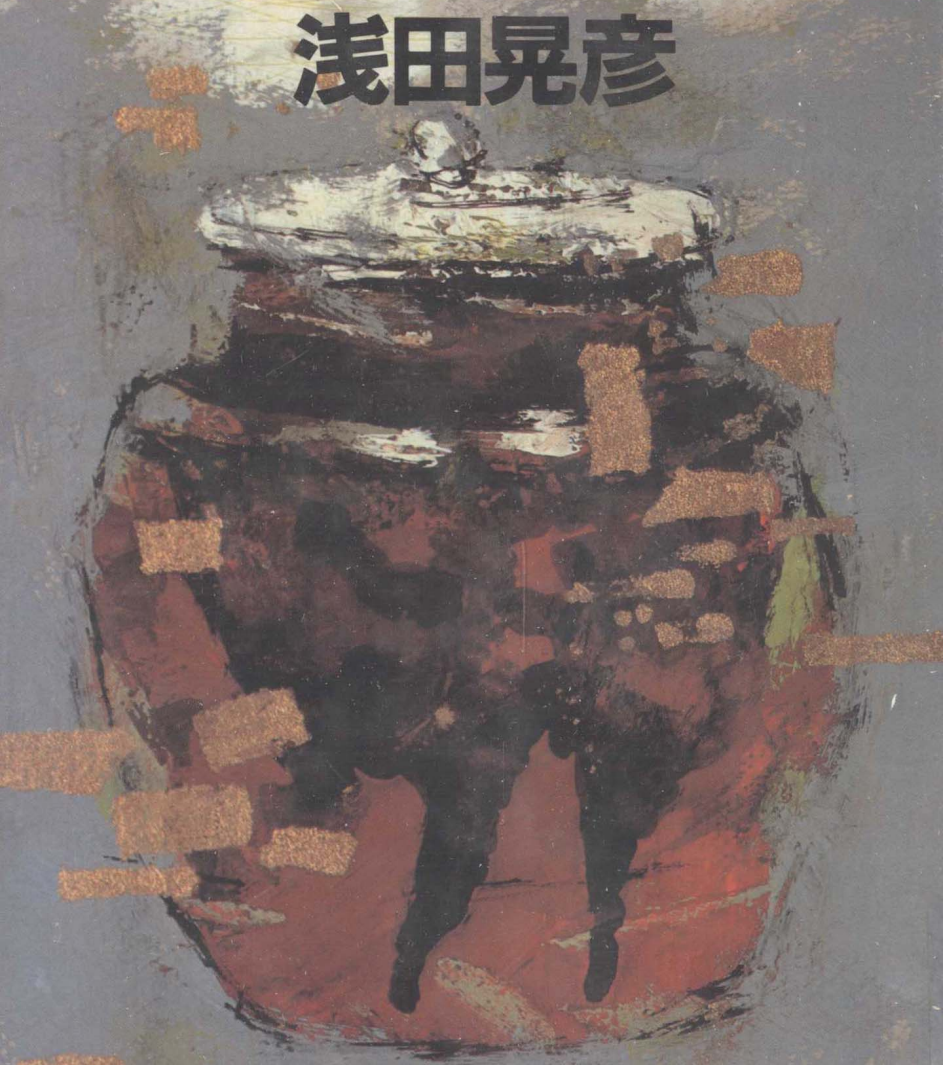


戦国茶道記

天下一の茶入「新田肩衝」の流転

浅田晃彦



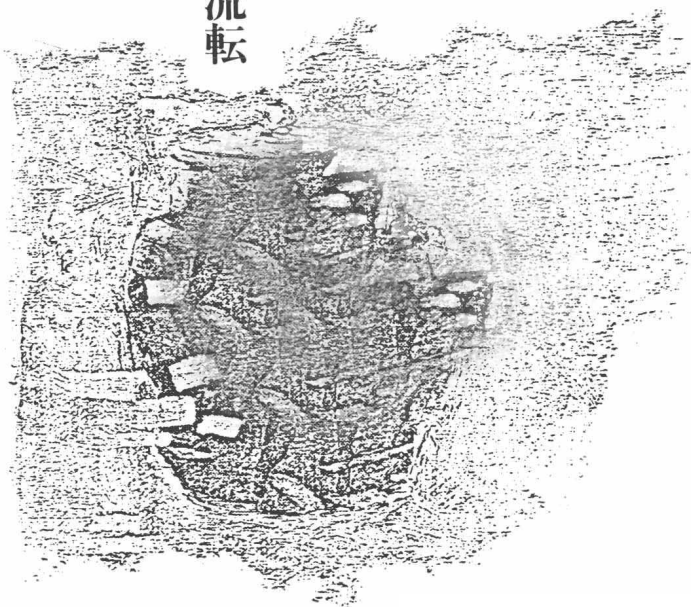
新人物往来社

新人物往来社

戦国茶道記

天下一の茶人「新田肩衝」の流転

浅田晃彦



〈著者略歴〉

浅田晃彦（あさだ・てるひこ）

大正4（1915）年生。慶応大学医学部卒業。
軍医，開業医，船医，国鉄医を経て現在歴史
小説・郷土史研究に専念。

〔著書〕『上州遊俠大前田栄五郎の生涯』（新
人物往来社）ほか多数。

作家賞，鉄道ペンクラブ賞，風雷文学賞，高
橋元吉文化賞，郷土史研究賞優秀賞受賞。昭
和43年下半年直木賞候補。

現住所 前橋市大手町2-2-7

検印廃止

戦国茶道記

昭和五十九年四月十日 第一刷発行

著者 浅田晃彦

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルディング）千一〇〇
電話東京（二二三）三九三一（代表）振替東京六一二五一六四三

印刷所 文栄印刷

製本所 小泉製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

はじめに

藤四郎と道元

儀源尼密記

旅の日の紹鷗

宗久と鉄砲

宗及茶湯日記

筑紫の坊主

むすび

五

九

四

七

一八

四三

七六

二〇八

戦国茶道記

——天下一の茶入「新田肩衝」の流転——

はじめに

喫茶の風習は中国から伝来し、日本において茶の湯という芸道に高められた。

その発展が平和な時期ではなく、前後二回の戦乱期に行なわれたことはまことに興味深い。そしてその主役は上級武士階級であった。

初回は南北朝とその前後の戦乱期である。この時代に茶の産地を飲み当てる闘茶という遊芸が流行した。佐々木道誉などが催した豪華な茶寄合が『太平記』に描かれている。

次回は応仁の乱に始まる戦国時代である。武野紹鷗・千利休など堺町人の茶匠が現われて、茶の湯を遊芸から芸道へ昇華させた。これを支持したのは武将たちである。領国争奪の戦乱に狂奔しながらも、時には草庵に知友を招いて一服の茶に静寂の時を過ごすことを忘れなかった。それは殺伐な日常を慰める風流であつたろうし、茶禅一味の悟りを目指す修行でもあつたろう。

しかしその実態は必ずしも高雅なものではなかった。なまぐさい戦国の風は草庵のなかにも吹きこんで、清談は往々にして密議に化した。あるいは所有の名物茶器を誇り合う場となった。茶の湯の世界もまた人間煩惱の世界だったのである。

名物茶器に寄せる執心は織田信長によって拍車をかけられた。信長は「名物狩り」

によつて天下の名器の大半を収集し、功臣への恩賞として与えた。「茶の湯御政道」を建て、認可のない者が茶会を開くことを禁じた。これによつて茶の湯は武将の身分権威の象徴となった。

豊臣秀吉は信長以上に茶の湯を好み、名器に執心した。天下一の肩衝かたつき茶入と称される新田・初花・檜柴の三つを、初めて秀吉が一手に収め得た。北野の大茶会は佗び茶の興趣を庶民と共に楽しむ意図と称しているが、実は獲得した名物茶器を展示して威勢を顕示するのが目的であつた。

当時渡来したキリシタン宣教師は茶の湯に興味をそそられた。喫茶という日常の行為が一つの芸道となつて流行していることに驚いたのである。さらに驚かされたのは使用されている茶道具の値段だつた。彼等の目には「小鳥の餌壺」としか用途のない茶入が数千貫で売買されると聞いて、「本国から送られる一年分の布教費より高い」と胆をつぶした。一個の茶器を代償に死罪を免れることがあり、一国一城と交換されたりすると聞いては、ただ呆れるばかりだつた。

領土争奪の戦国史はまた名器争奪の歴史でもあつた。今日伝えられている有名な茶道具にはそれぞれの由緒が付けられている。その多くは「漢作かんさく唐物」と称され、室町時代以前に中国から舶来したものである。その後輸入が絶えて数が限定され、茶の湯の隆盛によつて需要が増し、値段が騰貴した。その所有をめぐる権謀がめぐらされ、相剋が行なわれた。争乱の犠牲となつて消滅した名器も少なくない。

前記三つの大名物茶入も無論、数奇な運命に弄ばれた。数多の武将や茶匠の手を流転し、波瀾の物語を生んだ。そして最後には徳川家康の所有に歸した。檜柴は明暦三

年の江戸城大火によって行方不明となったが、新田と初花は現存している。

この小説は新田肩衝の来歴を軸として、その釉面に映りまた消えた人間模様を描いたものである。この茶入が見て来た戦国の人々の物語である。

〔注〕新田肩衝について『原色茶道大辞典』に次の記述がある。

新田肩衝 かたつき 大名物。漢作唐物茶入。新田は所持者の名と思われるがいかなる人物か明らかではない。挽家ひきやには「にった」とあり、また『万宝全書』には「仁田、新田共有」と記されている。その他はいずれも「新田」で、『山上宗二記』には「此壺肩衝ノ天下第一ナリ。初花・檜柴と共に天下に三名物ノ一ナリ」とあり、当時の珍重ぶりがうかがわれる。もと珠光所持で、三好宗三に伝わり、さらに織田信長を経て豊後の大友宗麟の有となった。これを天正十三年（一五八五）秀吉が所望し、代わりに「似茄子」と代百貫を与えたという。かくて秀吉はたびたびこれを茶会に使用し、利休もこれを借出して百会に用いている。大坂落城後、藤重藤元・藤巖父子が家康の命を受けてこれを焼跡より拾い上げ、修復して今日の姿をなしたわけで、その後水戸徳川家初代頼房が拝領して同家に伝来。高さ二寸八分、胴径二寸五分強、口径一寸五分の典型的な唐物肩衝で、初花・北野肩衝よりやや胴のふくらみが大きく、撫肩である。また畳付もこの種はたいい板起しであるが、これは本糸切で中央渦をなし、凹面になっている。釉景は漆の修復のために原状をしのびがたいが、ところどころにもとの景色をのこしている。

藤四郎と道元

(一)

貞応二年（一二二三）四月七日、船はようやく明州（寧波）の沖にたどりついた。

藤四郎は誰よりも早く宋国を見ようと、舳先につつ立って水平線に眼を凝らしていた。紫色の一線をなしていた大陸は次第にその太さを増して来たが、山らしい稜線がかすかにうかがえるだけで、何の形もつかめなかった。しかし、確かにそこが目的の地なのだ。

長い苦しい航海だった。筑前の博多を出たのが三月二十二日。半月の余もかかった。

一直線に東支那海を横断すれば四日か五日で着く。宋の商船はその航路で往復している。だがそこは波が荒く、小型の日本船では危険である。日数はかかるが安全度の高い北路を取った方がよい。高麗の海岸に沿って北上し、渤海湾を横切つて山東に取りつき、海岸伝いに南下するのだ。しかしこの航路とて暴風や海賊に襲われることがある。

「平穏な航海やったのう。高德な和尚さん達がお乗りやから……」と船名主の四郎左衛門がお世辞を

言ったが、誰も苦笑するだけで相槌が打てなかった。これが平穩なら荒れた海はどんなのか、と帰りが心細くなった。

出航してすぐ玄界灘で揉みくちやにされた。一行六人は船尾の一段高い屋形に乗ったのだが、芋のように転がされ、海へ投げ出されそうだった。長老の明全が嘔吐に苦しんだ。四十歳という年齢であり、もともと胃腸が丈夫ではないのだ。しかし若くて健康でも船酔いは別である。亮照は二十九歳でがっしりした体軀なのに、明全に劣らぬ苦しみようだった。三十三歳の廓然は死んだようにただっ伏していた。強かったのは二十四歳の道元で、下痢を起こしたが、柱に身体を縛りつけて坐禅を組み、気力で癒してしまった。二十七歳の木下清兵衛と二十一歳の藤四郎は従者として同行したのだから、酔ったからと言って寝てはいられなかった。吐物の始末をしたり、薬を飲ませたり、看護に疲れ果てた。

玄界灘を過ぎてからは波が小さくなったが、それでも船は揺れる。揺れない時は風のない時で、船が動かなくなってしまう。揚子江の沖で三日も風待ちをした。油鍋に浮かんでいるような暑さで、揺れるよりもつらかった。

しかしすべては昨日までのことである。舟山列島が防波堤となっている明州の海はまことに静かで、鷗が長旅の労苦をねぎらうように鳴き立てていた。

四郎左衛門が水夫を指揮して碇を投げこんだ。幾尋も沈まぬのに手応えがあった。この海は遠浅なのである。

「もう碇泊するんですか」

藤四郎は尋ねた。もっと陸地が見える所まで接近しなかった。船名主は太陽の高さに眼をやって答えた。

「今夜はここで骨休めや。あすの上げ潮で入港しましょう」

帆が畳まれ、帆柱も倒された。これから先は運河に入り、櫓を漕いで行くのだと言う。水夫たちの動きが活発だった。彼等もほっとしているに違いなかった。

「四郎左衛門——」

屋形から呼ぶ声がした。道元が手でさし招いていた。船名主は藤四郎と顔を見合わせ、ためらった後に手を挙げて答えた。

藤四郎も本名は四郎左衛門なのである。加藤四郎左衛門景正という。この船に乗り組んだ時、船名主が偶然同じ呼び名だったので、道元がたわむれに「船中では藤四郎と呼んで区別しよう」と提案し、皆が賛成したのだった。はじめは不快だったが、呼ばれているうちに自分にびったりした名のような気がしてきた。四郎左衛門など爺むさい。これからの宋での生活に新しく生まれ変わるのである。

藤四郎が従者としてこの一行に加えられたのは、道元の実家久我家の家来だったためだが、藤四郎自身の志願でもあった。久我家で見た宋の青磁や白磁の美しさに魅せられ、何とかしてその製法技術を学びたい、とかねがね憧れていたのである。

船尾の方へ歩みながら四郎左衛門が言った。

「同名のために迷惑をかけましたのう」

藤四郎の父親ほどの年齢だが、潮風に晒されたその顔には逞しい美しさがあった。

「いや、藤四郎と改名するつもりですよ。帰りもあなたの船に乗りたいですな」

「乗っていただきたいが、留学は三年の予定でしたのう。それまでこの船もわしも無事かどうか。あなたの方にも揃って帰れるかどうか」

船名主は不吉なことを淡々と口にした。

道元が待ち構えて尋ねた。

「阿育王山が見えるそうだが、どのあたりかね」

「さて、今の時刻では……」

船名主は額に手をあてて南の方を見つめた。太陽は落ちかかっており、陸地の帯は夕焼雲に溶け、ぼやけ始めていた。だが一同が瞳を凝らしていると、紫の帯の上に朱色に輝くものがくっきりと浮き上がった。

「あ、あれですよ。あれが阿育王山です」

束の間の夕陽のいたずらであろう。その朱色は忽ち褪せ、消え去ってしまった。それだけに一同の感激は強かった。阿育王山には宋の太宗が天竺から迎えた仏舎利塔がある。その靈山が姿を現わして到着を迎えてくれたように思われた。

「その右に天童山、その奥に天台山、ずっと右手に石門山や四明山があるんやけど、これらは遠くて、秋晴れの日でもよう見えません」

僧侶たちはうめくような声を上げた。それらは柴西や最澄や空海が訪れて修行した山々である。自分達が憧れて来た道場である。寝たきりだった明全も立ち上がった。船が安定したので船酔いが自然に癒っていた。

「安着を感謝して靈山に読経を捧げましょう」と道元が言うと、「そうだ、そうだ」と皆が法衣をつけ、香を焚き、明全の導師で普門品を誦し始めた。陸地にとどくような大きな声となって盛り上がった。木魚の代りに欄干を叩いた。

読経の最中誰かの腹がグウグウと鳴った。思わず笑いで読経が途切れた。正直なもので、船酔いが癒れば空腹が切実となった。

読経が済んだところで清兵衛が抹茶を皆に振舞った。大きな器にたっぷりと点て、明全から回し飲みした。

「清兵衛、よい物を用意して来てくれた。これでようやく人心地がついたぞ」

明全が舌鼓を打ち、皆も喜んで啜った。

藤四郎は抹茶は始めてだった。明全の師栄西が三十余年前から茶の種子を持ち帰り、各地で栽培を奨励したことは知っていた。桐尾高山寺の明恵が熱心で、境内に茶畑を作っていることを聞いていた。だが一般人には高貴薬のようなものだった。

「これは私が試作したもので、桐尾のものとは較べものになりません。明日は本場の茶が飲めると思うと胸が躍ります。宋では大量に生産されて、薬用というより嗜好飲料になっているそうですから」清兵衛は医師ではないが本草(ほんそう)(植物学)に精しく、建仁寺の薬草園を担当していた。従者として同行を志願したのは、本草研究の目的であり、貴重な新薬を発見して日本へ持ち帰ろうと企てているのだった。

抹茶の香(かぐ)しさに藤四郎は鼻をうごめかした。それよりも緑の色に眼をみはった。この色を青磁や白磁の器に盛ったらどんなに美しいだろうと思った。船名主が貸してくれた器は出来損ないのような陶器で、釉も満遍なくかかっていなかった。藤四郎が器をひねくり回していると、四郎左衛門が説明した。

「それは高麗の港の人足が使うていた飯碗ですよ。粗末な焼きやけど、形と色に味わいがあると思うて譲ってもらったのや。どうです、茶をいただくのに恰好でしょうが」

藤四郎は冷笑した。こんなものを自慢する気が知れなかった。宋へ往復しているくせに天目茶碗を見たことがないのかと疑った。

「私が帰る時には、もっともっと素晴らしい茶碗を差し上げますよ」

胸を張って約束した。藤四郎の臉には久我家で見た窯変天目の妖しい姿が映っていた。

一行六人、それぞれ野心を秘めていた。僧侶四人はどこかの道場に入って悟りを開きたいと言うだけだが、心の奥には競争心を湧かせているのである。三年間修行を積んだというだけでは帰れない。自慢できる土産を手に入れねばならない。名僧の印可証明、新宗派の嗣法書、未渡来の仏典や仏像や仏具……これまでの留学僧が持ち帰り、珍重され、尊敬を受けた、そういうものが欲しい。でなければ危険を冒して荒海を越えて来た意味がない、と心に期していた。

なかでも道元は意気軒昂だった。「日本の大師など土瓦に等しい」と言い放って出て来たのである。二十四歳の若さで留学僧に選ばれたのは、そもそもこの計画は道元の立てたもので、建仁寺の主催とはいふものの、費用の大部分は久我家から出ているからであった。明全は表向きの統率者にすぎなかった。

道元は皆を見回して提案した。

「明州に上陸した後は、それぞれ別行動をとることにしては如何でしょう。四人くっついて回っているのは修行になりませんし、収獲も少ないと思います」

明全がちよっと顔を曇らせたが、反対の言葉は出なかった。

藤四郎は内心小躍りした。従者の役を解放されるかも知れない。そしたら然るべき窯場の徒弟となつて、技術を習得しよう、ともくろんでいた。